

1994年の本。

セルフコントロールとは「欲する」こと・・・人間の偉大さは、自己を抑制することではなく、自己の真に欲することを実現するところにある、と私は思う。

## ジャーネーの法則

呪いをかけられた王子が白鳥になったりするたぐいの話は

『グリム童話』などでおなじみである。われわれは、そういうことは未開民族や童話の世界のことだと軽くうけながしているが、しかし、いつも子供に「お前は不器用だから」と言っている親は、実は、子供に呪いをかけているようなものだとも考えられないだろうか。親のことばは、子供にとっては一種の呪文となりうるのである。その呪文の効果があらわれるのは、十年、二十年後かもしれないが、心に刻まれたことばの力はけっして消えはしない。ことばを軽く考えてはいけない。

いつも「十三等書記官のシュガシヴィリノヴィッチ」などと言われていれば、本人は、いつのまにか、自分は十三等の人間なのだと思い込むようになるかもしれない。そして、小説や芝居で同じ等級の人物がもの笑いのたねにされているのを知れば、いつしか本人も卑屈になってしまうのは避けられないだろう。

その一方では、いつも、「いと高き閣下」と呼ばれている人間は、自分は本当に人間のなかの一等か二等の部類なのだと思い込むようになる。

こうして、尊大な人間はますます尊大になって、自分自身をなにか偉大なものと考えようになり、一方、卑屈な人間はますます卑屈になり、自分自身をことさら卑小なものと思うようになる。

・・・

ドイツの首相に就任したヒットラーは、首相などというありきたりの呼称ではもの足りないと感じたのか、「**総統（フューラー）**」という新しい呼称を自分のためにきめた。「フューラー」というのは、「指導者」という意味にすぎないのであるが、この新しい呼称によって、たんなる内閣の最高責任者にすぎない「首相」よりもはるかに絶大なる力を持った新しい存在であることを印象づけようとしたのであった。

私の考えでは、「**他人の立場に立って**」文章を書くことなどは不可能である。当然のことながら、「自分の立場に立って」書くことしかできない。そして、私に「わかる」文章しか、私には書けない。私としては、それが他人にもわかることを期待するだけである。私にわからない文章は、きっと、他人にもわからないだろうと思う。

・・・

このように、「人によくわかる」という文章執筆心得の第一条のさらに前に、「自分によくわかる」という一条が必要なようである。そして、その次に、「自分の主張があること」という条文もつけ加えたいと思う。私の好みから言うと、口当りがいいだけで、何の自己主張もないような文章は読む気にならない。欲張ったことを言えば、**その人にしか語れないようなものを含んだ文章だけを読みたい**と思う。

・・・

あふれるもの

がないのに、文章を書くということほど苦痛なものはなく、そういう文章を読むことほど味気なく退屈なものはない。自分にあふれるものがあれば、人を感動させるとまではいかなくとも、けっして退屈させるようなことはないと信じてまちがいはない。

悩みが人間をきたえるというのはたしかに事実であろうが、しかし、悩みや苦しみが人生を豊かにするとはなかなか思えない。たぶん、同じようなことでくよくよ悩んだりすることが少なくなったという点では、精神がきたえられるということはあるかもしれないが、別の些細なことで気をもんだりしていることは少しも昔と変わりがない。

・・・

過去の悩みや苦しみが将来役に立つという保証はないのである。

**高齢でもなお悩み苦しみ続ける老人の姿をみるたびに**そういう思いが強くなる。

悩みや不安は人生を豊かにし、人間をきたえるものというより、むしろ、人生を複雑にするものにすぎないのではなからうか。また、人間を弱気にさせることのほうが多いのではあるまいか。だれも**悩みや苦しみの渦中**にあっては、一刻も早くそこから**脱出**することしか**考えない**。自分自身がきたえられるために、より多くの苦悩を求めるといのは、やはりどこかしら異常である。

要するに、**相談とは他人に考えてもらうこと**であり、自分で考えることからの逃避である。

ときには不機嫌になったり、喧嘩をしたり、病気になったり、災難にあったりして、人間の善悪美醜のすべてがあらわれるのが**家庭**というものである。一途に「**明るい**」**家庭**など**というものは幻想にすぎない**。会社も学校も同様である。

同じいやなことを他人からされる場合、善意からよりも、むしろ悪意のほうが好都合である。善意は断わりにくいが、悪意はきっぱりと断わることができるからである。悪意の人は、自分のしていることが相手には歓迎されていないことをすぐ察知できるが、善意の人は、そここのところがなかなか呑みこめない。「**人のためを思ってしているのに、なぜそれがわかってくれないのだろうか**」ということしか**考えない**。つまり、善意あふれる自分の気持ちしか**考えない**のである。相手にそれが無条件に通ずると無邪気に思っているのである。

なぜ、他人のことを考える必要があるのだろうか。それは、自分のことを考えなくてすむためである。他人のために何かをしたと思うことで、何かすばらしいことをしたと思いたいのである。それは錯覚というものである。

すべては、自分のためにしているのである。

・・・

「他人のため（とくに主君や主人のため）」ということを単に「御為」とも言うが、このことばはさまざまに活用して、たとえば、「**御為倒**」となったりする。「おためごかし」と読み、表面は相手の利益をはかるように見せかけて、その実は自分の利益をはかること、という意味である。そういうことを実践する者を「御為者」といい、そういう様子をことさら顔つきにあらわすことを「**御為顔**」という。このようなことばやことわざからも、昔から人びとが善意の押し売り、善人の偽善にだいぶ悩まされてきたことがよくわかる。

同情から出発した行為はすべて不毛であり、悪い結果しか生まない。同情する人には、相手にたいして自分が優位に立っているという傲慢さがあり、同情を求める人は自分をあわれなものに見なす卑屈さがある。同情する人も同情される人も、たがいに自分をみじめな状態

におとしめているのである。

じっさい、憂鬱な顔で痛みを訴える老人に同情するというのは、けっしていい気分のものではない。こちらにも痛みが乗り移ってくるような気さえしてしまう

私が言いたいのは、茶道を今日まで存続させている原動力は、まさに、その偽善的な性格にある、ということである。

茶道をひとつのカルチャーに育てあげてきたのは、本来の姿を見誤らせるような、その巧妙で偽善的な儀式の体系なのではなかろうか。単なる茶会であったなら、こうも長年にわたって人びとの関心を惹きつけるようなことはなかったであろう。

高価な茶器を手に取り、あるいは由緒ありげな掛け軸をながめて、何か気のきいたことを言うという儀式は、何やらうさんくさいものである。しかし、このうさんくさいところこそ、茶道にかぎらず、書道、華道、柔道、剣道、武士道き、およそ「道」のつくものの生命なのである。うさんくさいところを取り去ったら、これらの「道」にいったい何が残るだろうか。本来は、日常の習慣や技術であったものに、うさんくさいものをつけ加えることによって、茶道や書道、車道などは出来上がったのではあるまいか。

柔道はもともとは柔術であり、剣道も剣術であり、はじめは単なる格闘の技術にすぎなかった。格闘には儀礼や儀式は無用である。武士道も、本来は、要するに兵士の技術、つまり人殺しの方法にすぎない。武士が人殺しに専念していた時代には、もちろん武士道などというものは生まれるはずがない。時代が平和になって、人殺しの専門家である武士の存在が社会的に煙たがられるようになったとき、武士はみずからの存続を合理化するために、武士道というものを考え出した。

江戸時代の末になると、満足に馬に乗れる武士も少なくなってきたという。幕末の武士社会の内幕を記録した『戊辰物語』という本によれば、与力や同心は、武術の鍛練などはすっかり忘れて、十手をどう振れば朱房がパッと開いてかっこうがよいとか、朱房よりは紫房のほうがいいとか、そんなことばかりしか頭になく、みんな集まっては、十手の房がうまいぐあいに顔の前で開くことを競う競技会のようなものを開いて時間をつぶしていたという。

犯人をつかまえることを忘れて、十手の振り方を競うようになる——これが「道」というものに共通して見られる特徴である。日本人はとくにこういうことを好むようであるが、ヨーロッパにもないわけではない。ヨーロッパで、本来の騎士が姿を消してから、騎士道というものが生まれたのは、そのいい例である。ドン・キホーテの物語は、騎士なき時代の騎士道の虚構ばかりでなく、およそ「道」と名のつくものの虚構ぶりを語っている。

ところで、なぜ、このように「術」は「道」をめざすのだろうか。

そこにはさまざまな背景が考えられるが、もっとも大きく作用していると思われるのは、きまりきった日々の仕事や活動を、できることなら何かすばらしいもののように思わないという願望であろう。同じことでも、それに与える意味や価値によって、ちがった姿に見えるこよもある。同じ茶を飲むにしても、手のこんだ儀式を経過することによって、なにかありがたく思われる。同じ人を斬るにしても、そこに武士道の精神が介在すれば、何か高貴な行為をしているような気分にとらわれ、罪悪感や恐怖心もやわらぐ。上手なのか下手なのか門外漢には判断のつきかねるような筆跡も、書道という名のもとで、芸術的作品と見なされるようになる。

いずれもうさんくさく、偽善にみちているが、すべては「付加価値」をつくり出すための必死の努力なのだとは言えまいか。そして、このような「付加価値」こそ、われわれが「文化」という名によって呼んでいるものにほかならない。このうさんくさい偽善的な「付加価値」を取り去ったら、おそらく人間の歴史には何も残らないと言っていいかもしれない。文化住宅とか文化鍋、文化干しなど「文化」をつけて呼ばれるものには、どこかインチキくさいものが感じられるのはそのためである。

だますことと、信用されることとは表裏一体であって、信用されることは、だますことの出発点である。信用されなければ、だますこともできない。

うまいことを言って、人びとを幸福な気分にするという詐欺師のやり口

人間にとってもっとも必要なのは、ものごとを知るのではなく、いかにして幸福に生きるかという知恵を身につけることである。

人生でもっとも価値あることは、仕事を楽しむことである。